opusdei.org

第一章:この世界を 愛した司祭 (11.Q05)

1. 私は無価値なみじめな者、しかし価値ある愛で一杯の者 (11.Q05)

2010/07/13

11.Q05 - 同じように、司祭への召し出しとオプス・デイへの招きを疑うことはありませんでした。

11.A05 - 神への愛から、召し出しを「いじりまわしてはならない」と繰

り返していました。その全生活には 「一度も神の愛を疑ったことはな い」という言葉が、心と行いにリト ルネロのように反複されていまし た。

司祭への召し出しは、困難や失望あるいは失敗が原因になって決めの出しないで表になって決めの事情や家庭の事情や家庭のもおという。 事の影響を受けて決めたりで引越して決めたり、 を受けて決めたり、そのようではないの事業とや、ためで引越他孤はを会してといいです。 理由で生ん。ましてや、将来に神とのではないのです。 も、意気消沈したり失望しません。 はありませんでした。 はありませんでした。

司祭叙階を四ヶ月後に控えた1924年 11月27日、ホセ・エスクリバー氏が 急逝されました。ずいぶん後になっ て、この特別に大変だった時期につ いて次のように語るのを私は聞きま した。「父の死がそれより数ヶ月前だったら、確かに私は自分の道について再考の必要を感じたでしょう。しかし、副助祭に叙階された後でしたから、一瞬たりとも自分の道を疑ったりはしませんでした。」この言葉からして、疑いの陰さえもなかったことが肯かれます。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/dizhang-konoshi-jie-woai-shitasi-ji-11q05/(2025/11/21)